

上海における産後ケアの商業化

—人口政策の変遷と月嫂の役割変化—

齋 藤 あおい

中国には、出産を終えた女性が1か月間養生する「坐月子」と呼ばれる伝統的慣習がある。この期間中のケアは主に女性親族によって行われてきたが、2000年代以降、上海などの大都市においては商業サービスがその役割を担うことが増えている。本稿ではこの現象に注目し、産後ケアを専門とする家政サービス員・月嫂に対する役割期待の変遷を追うことで、人口および生殖をめぐるジェンダーの政治が、伝統的な産後ケアの慣習にどのような影響を及ぼしているかを考察する。

上海の地元紙『新民晩報』の分析からは、1990年代末に国有企業解体で失業状態にあった上海女性の再就職先として月嫂という職業が生まれたこと、そして2007年のベビーブームを機にその利用が進んだことが明らかになった。さらに2010年代に入ると「優生優育」の人口政策のもと、上海女性は「素質」の高い子どもを産むための科学的根拠に基づいた行動をとることが求められた。このような社会変化の中で「坐月子」の過ごし方が見直され、月嫂は「科学的」ケアを提供する専門家としての役割が期待されるようになった。「二人っ子」政策以降は、二人目の健康な子どもを産めるよう「科学的」な「坐月子」を通じて体調を整えるべきといった言説が強まり、月嫂のニーズもますます高まっている。本稿では、月嫂の研修内容にも注目し、特に高齢出産が増加する上海において月嫂が産婦の不安解消に果たす役割を検討する。

キーワード：産後ケア、中国、坐月子、家政サービス、優生優育

はじめに

本稿は、現代中国都市において伝統的な産後ケアの習慣が商業化される現象に焦点を当て、産後の母子ケアを専門とする家政サービス員¹⁾への役割期待の変遷について、新聞報道の分析と研修施設での参与観察を通じて明らかにしようとするものである。

中国社会では「坐月子（ツオユエツ）」と呼ばれる習俗において、産褥期の女性と新生児が1か月にわたって養生することが通例であり、その間には特別な産後ケアが必要とされる。出産したばかりの女性は1か月の間、食事や日常動作における決まり事を守りながら、生まれた子どもと共に安静にする。その際、外気や水に触れるのを避け、なるべく動かずに部屋の中でじっと過ごすべきとされる。炊事や洗濯、掃除や新生児の沐浴も産後の身体に負担がかかる行為であるため、伝統的には同居家族の女性や、普段は同居していない親族女性に任せることになる。このように産後1か月の女性は家族・親族からさまざまなサポートを受ける形で「坐月子」を過ごすものとされてきた。しかし2000年代以降の上海や北京といった中国都市部では、「坐月子」のケアを専門的に行う家政サービス員「月嫂（ユエサオ。以下、月嫂とする）」を仲介するサービスや、医師や看護師が常駐する中で母子が過ごせる施設の利用が普及している。本研究のフィールドである上海は、2000年前後にいち早く産後ケアビジネスが興った都市の一つである。留意したいのは、月嫂は福祉ではなく、あくまでも商業サービスであるという点である。産後ケアの慣習は家族・親族関係を離れ、経済力があれば市場関係の下で実践が可能なものになりつつある。

周知のように、中国では改革・開放路線がはじまった1970年代末から、いわゆる「一人っ子政策」と呼ばれる計画生育の取り組みにおいて、人口抑制の方針がとられてきた。しかし近年ではむしろ出生の低下が人口の危機をもたらすであろうことが問題視されており、人口政策も2013年に「単独二孩」（両親とも一人っ子の場合は第二子の出産を認める）、2015年には「全面二孩」（全面的に二人の子どもの出産を認める）、そして2021年には第三子の出産を奨励する方向へと転換している。このような人口と生殖をめぐるジェンダーの政治は、産後ケアの商業化に何らかの作用を与えてきたのではないだろうか。

本稿は、上海で新興産業として成長した産後ケアビジネスにおいて、月嫂がどのような役割を求められてきたのかに焦点を当てる。研究方法は、上海のローカル紙『新民晩報』の報道から、上海における産後ケアビジネスの成立と発展の経緯を明らかにする。また同じく『新民晩報』の記事をもとに、中国の人口政策の展開がどのように産後ケアと結びついていったのかを考察する。最

後に、一人っ子政策が終了した今日の上海社会において月嫂が求められる役割について、筆者が2023年に実施した月嫂研修施設におけるフィールドワークの成果を参照しつつとらえていく。

1. 先行研究

「坐月子」は中国固有の習俗であるが、産後養生の慣習そのものは、台湾、韓国、東南アジアといったアジアの国々を中心に世界各地で見られる。決まり事、過ごす場所、慣習を支えるロジックや過ごし方、ケアの提供者は地域ごとに異なるものの、産後の女性はしっかりと養生すべきという考えのもと大切に行われている。そして近代化に伴う出産の医療化、商業化も共通して起こってきた。

松岡 (2022) は、ジェンダーの視点から東アジアにおける医療介入の歴史研究をしている。松岡によれば、韓国においては1970年代までは親戚や姑などが出産を介助していたが、1989年の国民健康保険の導入によって医療費が減少したことで、人々は設備の整った病院での出産を選ぶようになったという(松岡 2022: 233)。かつては産後ケア役割まで女性親族が担っていたものの、現代韓国では、「産後調理員」という、産婦が子どもとは別部屋で身体を休ませることのできる施設で過ごすことが一般化している。松岡はその理由として、上の世代の女性が仕事をもつようになり家で娘の産後ケアができなくなったこと、産科病院が産後ケアビジネスに進出したこと、医療介入(韓国の帝王切開率はアジアの中で最も高い)により産後の回復が長引くようになったことが背景にあると分析している(松岡 2022: 235)。出産の形態が変わると、伝統的な産後養生の慣習もケアの担い手や過ごす場所が変わってくる。嶋澤 (2022) によれば、ラオスでは「ユーファイ」という名の産後養生の慣習において、産婦が火のそばで身を燻すという習わしがあったが、1990年代になるとラオス政府がやけどや呼吸器障害などのリスクを指摘し、悪しき習慣ととらえられるようになったという。ただし身体を温めることの効用は見直され、健康被害を起こさない方法をとるよう啓発が進められた(嶋澤 2022: 238)。

韓国やラオスの事例からは、伝統的に望ましいとされる出産や産後ケアをめぐる言説は医療化の文脈の中で変化しつつあるということが読み取れる。このような状況は、本稿の対象とする中国社会においても共通している。中国についても小浜らが、計画経済期(1949年～文化大革命収束後の1978年)から市場経済への移行の間に母子保健の一環として病院出産が進められ、産婆から医者へ代わったことを明らかにしている(小浜・何・姚 2009, 小浜・松岡

2014)。こうした研究は出産の場や分娩方法、子どもを取り上げる役割の変化を対象とし近現代における医療化の様相をとらえてきた。ただし筆者の見解では、産後ケアの商業サービス化をこの文脈に関連づけて実証的に考察する研究はないようだ。

産後養生の慣習「坐月子」については、翁が上海での月嫂養成訓練についての参与観察や聞き取り調査から資格取得のプロセスを明らかにしている。翁によれば、2010年代の上海で月嫂の資格を取得するには、市内のトレーニングセンターで155時間の訓練を受け、病院での研修を経て試験に合格すると、月嫂の派遣事務所に登録される流れがあったという（翁 2014：109-110）。翁の研究において月嫂は「母嬰護理師」という国家資格の下で成立する職業としてとらえられていた。今日の中国においても資格取得には研修を受ける必要があるものの、筆者が訪れた2023年の上海では、研修期間や内容、付与する証書も企業が独自に定め発行していた。

また、「坐月子」の商業サービスが登場してから今日に至るまでにビジネスとして定着した背景については、産婦への質的調査を行った研究群が存在している。こうした先行研究では、改革開放後の良質な教育を受けた女性には決まり事の多い「坐月子」が好まれないこと、産婦と年配女性との間に「坐月子」の過ごし方をめぐって軋轢が生じてしまうこと、月嫂は専門的なトレーニングを受けた科学的ケアの提供者としてまなざされており、若い世代に好まれるということを示唆してきた（安 2015, 翁 2014）。つまり月嫂は、家族関係の軋轢に割って入れるほどのプロフェッショナルリズムや、若い女性の要望を叶えられる専門性を携えた存在としてみなされてきたといえる。

このような先行研究がとらえてきたのは、2000年代以降、少なくとも月嫂の利用が「坐月子」の選択肢として一般的になって以降の時代における状況である。そこでは月嫂のニーズが社会的に認識され、サービスの市場が拡大した後の文脈が想定されている。しかし本稿で後述するように、月嫂という新しいサービスが登場しビジネスとして定着するまでの過程では、これをいぶかしく感じたり、否定的な見方をする人もいたようだ。

「坐月子」の商業サービス化は、この20年余りのあいだに直線的に発展してきたわけではなく、同時代的な経済体制の抜本的な改革の下で推進された労働力の再配置、国家による人口政策の変遷、そして経済発展のなかで現代的なライフスタイルを維持しながら産後を過ごしたいと望む都市女性たちやその家族の意識変化のなかで、絶えず再編されながら拡大してきたと見るべきではないだろうか。

このような問題意識において本稿は、中国で最も早くから職業としての月嫂

が登場した都市である上海を対象に、月嫂が求められてきた役割について、同時期の人口政策やその下での計画生育の取り組みの変化との関連も含めながらより詳細に見ていきたい。

2. 上海におけるビジネスとしての月嫂の成立と発展

商業サービスとしての月嫂は、上海という都市でどのように生まれ、成長してきたのだろうか。上海のローカル紙である『新民晩報』²⁾の記事を経年的に追うことで、ビジネスの歴史をとらえたい。本稿においては電子化されたデータベースを用いてキーワード検索を行ったうえで、上海図書館で本文にあたった。以下の図1は、『新民晩報』における「月嫂」について報じられた記事³⁾の件数を全て抽出したものである。

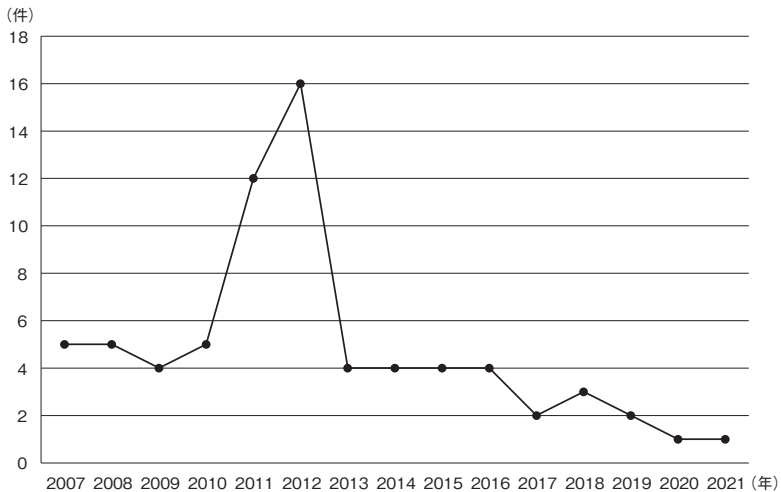


図1 『新民晩報』における月嫂関連記事の件数

『新民晩報』において、初めて月嫂関連の報道があったのは2007年のことであった。2007年9月13日の記事では、「60年に一度の金猪年で13.7万人の金猪ベビーが誕生する。出産予定日の1か月前では月嫂の予約が間に合わない」とあり、「金猪年（丁亥年。この年に生まれた子は縁起が良いと言われる）」のベビーブームを皮切りに、月嫂の供給が追い付かないほど人気を博したことが報じられる。

翌年2008年になると、月嫂の利用の流行について概観するような記事が散

見された。以下の二つの記事は、共に2008年12月の報道である。

「誕生から今年で10年。職業としての月嫂は「母嬰護理員」という名称で、「中華人民共和国職業大典」に掲載され、正式な職業となった。現在月嫂の月収が3000元であることは珍しくなく、経験豊富な者は4000～5000元に達することもあり、上海のある月嫂会社では最高ランクの月嫂に対してさらに高額な月給である6800元を提示している」（新民晩報2008年12月16日）。

「上海では毎年約15万人の新生児が生まれ、そのうち約3分の1の家庭が月嫂を雇っている。これは2万人以上の月嫂が5～6万戸の家庭に坐月子のケアサービスを提供しているということであり、社会への貢献は大きい」（新民晩報2008年12月17日）。

2008年12月16日の記事における3000元というのは当時のレートでおおよそ42000円相当であり、上海市の2009年6月新卒者の平均月給が2924元（JETRO 2010）であったことを踏まえると、高給であったことが伺える。同記事によれば、上海で職業としての月嫂が初めて登場したのは1998年であったという。上海市総工会と労働部門とが下崗⁴⁾された女性の再就職を促進するために、母嬰護理訓練（母子ケアのトレーニング）を開始した。北京に本社を構える中国共産党中央委員会の機関紙『人民日報』は、2000年「社区⁵⁾で仕事を探そう」という記事で、下崗された女性の再就職先として、上海の社区で母嬰ケアサービス業が登場したことを紹介している。なお大橋は2000年頃の中国における家政サービスの動向を紹介するなかで、下崗女工たちの職業訓練のなかに「月子保姆」を養成するクラスが登場していることを示唆している（大橋 2004：13）。これは「坐月子」の期間に特化した家事労働者であり、本稿がとらえる月嫂と同一のものと位置づけられよう。つまり上海では、国有企業改革が推進された1990年代後期という段階において、女性の再就業訓練の文脈で月嫂が登場していた。坐月子のサポートを新しい職業とする動きは全国的に見ても早い動きであり、故に注目されていた。

一方、2000年代の上海市において、再就職の問題は、国有企業改革のなかで下崗問題がクローズアップされた1990年代末に比べ下火になってきていた。この時期に月嫂の再就業トレーニングを主導していたのは上海婦女聯⁶⁾であり、トレーニングを受けていたのは、下崗された上海女性の中でも、年齢的な問題で1990年代のうちになかなか再就業ができなかった女性であった。しか

し国営企業の社員から人の家庭に入って奉仕する月嫂のような家政サービス員へ転身するというのは女性たちにとって耐えがたいものでもあったようだ(齋藤 2023: 142)。

上海女性の職業として、月嫂は定着しなかったのだろうか。2007年9月13日の『新民晩報』には、上海市内で月嫂が不足しているために、打工一族網という人材プラットフォームでは中国東北地方の家政サービス業者から100名の家政サービス員に上海で研修を受けさせて登録し、月嫂として派遣したと記述されている。また、同年2007年には、上海市内の家庭で掃除や洗濯を通いで行っていた安徽(あんき)省出身の出稼ぎの家政サービス員女性が、月嫂ならば同業にもかかわらず破格の報酬が得られると知り、8回の無料トレーニングに申請して資格取得、転職を決めたという記事も見られた(2007年9月30日)。ベビーブームと月嫂の担い手の圧倒的な不足、高いニーズによる高収入から、月嫂になる女性は下崗された上海女性から、外地の女性へと変わってきたことが予想できる。

2008年の『新民晩報』で報じられたもう一つのトピックは、サービスの質である。「高給取りの月嫂はおむつ替えすらまともにできない(2008年2月1日)」「月嫂のスキルが低いとママが苦しむ(2008年8月8日)」といった見出しが続く。月嫂が高額の報酬に見合う働きをしなかったこと、十分な訓練を受けていないことを問題視する報道が見られるようになる。

「3000元かけて雇った月嫂は経験豊富を謳っていたが、おむつを替えるのも満足にできず、哺乳瓶やおしゃぶりの扱いも分かっていない。1日105元を支払って、洗濯と床を拭くことしかできず、乳房マッサージや体操、乳児のケアができない。これでは保姆と何が違うのか!」(新民晩報2008年2月1日)。

「よりよい子育てのため、3800元を支払って仲介会社から月嫂を雇った。しかし基本的な哺乳の知識もない。出産したばかりで起き上がれず、座って授乳できない場合どうしたらよいかと訊いたら“専門家”の意見として四つん這いになって授乳しろと言われた。でも友人がそんな私の姿を見て、吹き出しそうになっていた! 2人目の月嫂に替えてもらった。まったくたいそうな“専門家”だ!」(新民晩報2008年8月8日)。

これらは実際に月嫂を雇用した人への取材記事である。新興産業ゆえの混乱と、月嫂に対しては専門的な乳児のケア、産婦への乳房マッサージといった期

待がかけられていたことが読み取れる。また、「保姆と何が違うのか」という発言からは、都市生活の再生産労働を安値で支えてきた女性たちと、高収入な月嫂との違いが本当に存在するのか訝しげにみるまなざしを感じられる。「保姆」とは日本の保母や保育士の仕事のことではなく、日本語の「お手伝いさん」のような意味の中国語口語表現であるが、中国では社会的地位が低い仕事という感覚をとまなう⁷⁾。こうした背景からも、上海で下崗された女性たちには家事労働者という職業が定着しなかったことが予想される。

2008年頃の『新民晩報』は、産後ケアサービスの質を問うと同時に、月嫂の労働環境についての懸念にも目を向けた報道を行っていた。2008年12月16日の『新民晩報』は、月嫂は「做六休一（6日働いて1日休む）」も保証されず、「361行（1年の内361日働ける）」と評されるような過重労働になっていたことを報じた。この事件は上海以外の地方紙でもとりあげられた。一例として2008年12月18日の遼寧（りょうねい）省瀋陽の地方紙『時代商報』「月嫂の過労死という悲劇を繰り返さないために」という記事は、1998年の上海における「母嬰護理」再就職トレーニングのはじまりから今日に至るまで月嫂という職業の高給ぶりがセンセーショナルに報道されてきたものの、その特殊な労働形態についての議論が不十分であったことを指摘した。この記事は、月嫂は各家庭に1人ずつ従業することが多く、その労働状況が人目に触れることが少ないことをとらえ、上海にはまだ個々の家政サービス員を取りまとめるような機構が存在しない点が喫緊の課題として挙げられた。

続く2009年～2010年の『新民晩報』では、市の労働保障部門が発行した証書を持った月嫂が信用に足ること、月嫂を雇う際に身分証や健康証明、無犯罪記録証明をチェックすべきといった内容が報じられ（2009年4月15日「月嫂を選ぶ際には4つの証書に注意しよう」）、業界の規範化を進めていこうとする変化が見られた。

2011年に入ると、月嫂関連の記事が急増する。多くは2011年4月にCCTV（中国中央テレビ）で放送開始されたドラマ『月嫂』についての報道で、地方から上海に移住して月嫂になる女性主人公の役に、実力派の俳優である倪萍（ニーピン）が抜擢された（2011年4月22日「倪萍、不格好な役にも恐れず—新ドラマ『月嫂』の主演、来週CCTVで放送開始」）。そのドラマのストーリーに倣って、再開発前の上海の貧しい地域から都心に移り月嫂となって高収入を得た女性を紹介する記事も見られた（2011年5月30日「浦東の数百人の貧しい母親が月嫂になる」）。

2011年は、月嫂関連記事における月嫂の説明が大きく変わった時期でもあった。例えば以下のような内容である。「月嫂は母親と新生児のケアを専門とす

る新興の職業であり、赤ちゃんと母親に最も科学的で健康的なケアを提供することができる」(2011年10月20日「上海の月嫂市場は各地で人手不足となっており、今月は価格が高騰している」)、「月嫂は、科学的な「坐月子」や育児に関する新しいアイデアを広める専門家であり、赤ちゃんが生まれたばかりの最も慌ただしい月に若い夫婦を助ける存在でもある」(2011年10月31日「月嫂を雇うとき間違わぬよう!」)。2012年以降の記事は、辰年のベビーブームが起こったために、価格の高騰や人手不足が起きているといった2007年の金猪年と同様の内容になっていくものの、月嫂という存在は「科学的」な坐月子を広める存在として描写された。その理由について、次節で見していきたい。

3. 人口政策の変化と月嫂の役割

3-1. 「素質」という言説装置

前節では、新聞報道を通じて上海における月嫂の成立と発展の歴史を追ってきた。本節では、月嫂が「科学的」ケアの担い手となっていった背景として、人口政策の変化をとらえたい。とりわけ「素質」(suzhi)という概念を軸に、2000年代の人口政策の下で起きた「坐月子」および月嫂ビジネスの変化について分析する。

同時代的には、英語圏を中心とした中国地域研究において、人口抑制と市場経済化の動向に「素質」(suzhi)という概念がもつ意味に着目した考察が多くなされていた。日本語における「素質」が生まれつきの性質を意味するのに対して、中国社会において「素質」は、人に生まれつき内在すると同時に、後天的に高めていけるような資質としてとらえられている。この語義において、特定の集団の社会的な劣位性が、その人びとに内在する問題として論じられる際には「素質が低い」という表現がなされることも多い。人類学者のKipnisは中国語の「素質」という語彙の大衆的な用法として「農民工、あたり構わずゴミを捨てる者、ちび、近視の者、みすばらしい者を差別する際に使われる」と解説している(Kipnis 2006: 296)。近年でも、特に都市に住む者がマナーの悪い人を指すときによく聞かれる言葉である。

人文地理学者のSigley (2009) は、マルクス主義的な価値論のアプローチを参照しながら、「素質」が資本主義やポスト社会主義の生産様式における価値形成において重要な役割を果たしていると指摘した。Sigley は、中国社会では「素質」が人間の身体や行動を分類し、評価するための最も普遍的なカテゴリーになっていると指摘し、この概念を用いることで個人や集団の比較が可能になっていると論じた。つまり「素質」は、「低い素質」と「高い素質」などの

階層を構築し、時には「無価値」な者を決定する (Sigley 2009: 539)。この議論を通じて Sigley は、中国社会において欧米列強に追いつくための「現代化」をどのように進めていくかという問題が、その社会を構成する個人の問題として捉えられ、高い「素質」がない限り「現代化」は達成されないとみなされていることを論じた。こうした趨勢の下で、「素質」という概念は政府に人口政策として重視され、計画生育や教育といった契機を通じて個人が向き合うべき課題として言説化されていった。

「素質」はとりわけ妊娠、出産や育児に関連して、「優生優育」という概念と結びついてきた。「優生優育」とは市場経済期以降 (1978年～今日まで) の中国において、とりわけ計画生育に関わる文脈で散見されるスローガンである。法制度や政策に関連して「優生優育」をとらえるならば、この概念を「より良く産んで (出生人口の資質向上)、よりよく育てる (母嬰の健康保護)」という意味で用いられると述べる。「優生」はいわゆる優生学や優生思想など遺伝にともなう「問題」に着目した概念であるが、「優生優育」が問われるとき、その範疇には非遺伝的な医療ケアの実施も含まれる。また、「優育」には新生児や幼児を科学的知識と方法に基づいてより良く育てるという意味も含まれる (于ほか 2013: 126-127)。また姚 (2022) は、「優生優育」事業が中国において計画生育と結びついた過程を分析している。婚前医学検査と出生前検査といった露骨な優生思想を盛り込んだ「中華人民共和国母嬰保健法」(1995) が施行されて以降、中国の人口政策は、生まれてくる前の生命に科学的技術を用いて干渉することで人口の「素質」を担保する方へと向かったという (姚 2022: 37-39)。

こうした政策的な取り組みは学術組織とも連携している。とりわけ衛生部と民政部の支持において1992年に創設された中国優生科学協会は、その憲章において「为推动我国优生科学事业的发展, 提高中华民族的健康水平和出生人口素质, 促进社会主义和谐社会建设服务 (我が国の優性科学事業の発展のために、中华民族の健康水準と出生人口の素質を高め、社会主義和階社会⁸⁾建設を進める)」と明記する。こうした取り組みを通じて「優生」と「優育」は、国家の発展のための重要な課題として社会的に広く宣伝されている。

出産について「量より質」が重視され、中国社会の発展のために「高い素質」の子どもを安定して産むべきだという主張が主流になっていくと、出産する母親の身体も重要だと考えられるようになってきた。この流れをふまえ、上海社会において「優生優育」の言説政治がどのように作用してきたのか、そしてそれが産後ケアにいかにつながってきたのかを、再び『新民晩報』の報道から考えてみたい。

3-2. 「優生優育」と妊娠・出産の変化

以下の図2は、『新民晩報』において報じられた月嫂関連の記事と、「優生優育」関連記事の件数を比較したものである。

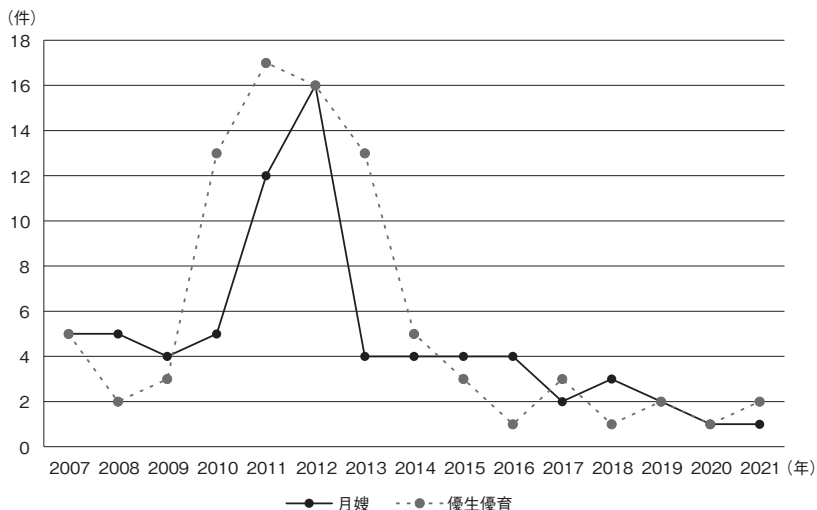


図2 『新民晩報』における月嫂と優生優育の関連記事の件数

月嫂と「優生優育」の関連記事の登場時期および件数は、2010年以降に件数が急増している。2010年頃というのは、前節で述べたように、月嫂が「科学的」ケアの提供者として報道され始めた時期であった。では、「優生優育」の関連記事とはどのような内容であっただろうか。

初めて報道のあった2007年3月29日の記事は「“優生優育の推進”は、少なくとも体育の成績を“良”にしなければならない」という表題で、体育の授業を通じて子供たちの「素質」を高めようとするものであった。同年の他の記事も同様の内容であった。

2011年の『新民晩報』における「優生優育」関連記事17件の記事のうち、16件の主要テーマは、上海市内で無料の妊娠前検査が始まるという内容であった。2011年2月24日の記事「妊娠前の優生健康検診と指導を無料で受けられる」によれば、無料の妊娠前検査は「優生健康検診プログラム」の一環であり、上海市の静安区、楊浦区、松江区の3つの地域が国家の試験地域に指定され、市の人口計画生育委員会の指導のもとパイロット事業が開始されたという。2011年11月30日の記事「新しい家族が健康な赤ちゃんを育てるための土台作り—

市の妊娠前無料優生健康検診プログラムがさらに前進」は、健康な新生児を産み育てるための妊娠前無料優生健康診断を開始し、妊娠後に先天性異常予防検診を実施するための主要・高リスクグループを特定したと報じた。つまりこの妊娠前検診は、先天的疾患のある子どもが生まれるリスクを減らし「優生優育」を推進するためのものであったことが分かる。2012年末にかけて、市内全域で検査が順次行われたことが報じられた。

同時期の『新民晩報』では、「優生優育」について報じられた記事の中で理想的な妊婦の行動が呼びかけられる。「妊婦の栄養状態は胎児の健康に影響を与える重要な要素である。賢い赤ちゃんを妊娠するためには、母親自身の栄養摂取に注意する必要がある、特にDHA、脂肪酸、タンパク質、亜鉛、鉄分などの摂取に注意を払うべきである(2011年7月25日)」。翌年2月13日の記事は、同済大学附属病院産科の医師による監修のもと、妊娠中の女性の行動が生まれる子どもに与える影響について事細かく書かれている。「来年、辰年ベビーを出産予定なら、今年のパレンタインデーは優生優育の話をしよう。葉酸が神経系欠損の予防に重要なことは知られているが、果物や野菜、卵、動物の内臓にも豊富に含まれているため食事で摂取できる(2012年2月13日)」。他にもアルコールが卵子に影響を与え葉酸の吸収を悪くすることで奇形児が生まれる可能性について警告した。「科学的」な知識を用いて母親自身の体調を整えることで「素質」の高い子を産み育てることが強調された。

このように「優生優育」のキャンペーンにおいて「素質」言説は妊娠・出産のありようを変え、健康な子どもを産み育てよう女性たちに求める圧力となってきた。この流れの中で産後ケアを「科学的」に行うことの意味が強調されてきたのである。

3-3. 計画生育の方針転換における産後ケアの変化

2010年代には、計画生育の政策方針は大きな転換を迎える。本稿冒頭で論じたように、中国共産党は2013年11月の第18期中央委員会第3回全体会議において、夫婦のどちらかが一人っ子である場合は子どもを2人までもつことができるという「単独二孩」の方針を打ち出した。その後2015年10月の第18期中央委員会第5回全体会議では、すべての夫婦に二人目の子どもを認める「全面二孩」方針を公にし、さらに2021年5月には中央政治局会議において「三孩生育」、すなわち3人目の出産を認める方針をとった。

このように人口政策の大きな変動を経た2020年代の中国の都市社会において、出産のありかたは実際、大きく変化しつつある。本稿が着目する上海を例にとらえれば、2022年に出産した上海女性のうち、一人っ子を産んだ割合は

66.01%, 二人っ子が29.46%, 3人以上が4.53%であった。だが一方で、上海は他地域に比べても晩婚化が進んでおり、初産年齢も高いことで知られる。2023年に公表された「上海市2022年人口観測統計数拠」によれば、2022年の上海市全体の合計特殊出生率は0.7であり、世界最低水準である韓国の0.72 (2023)と並んだ。平均結婚年齢は男性が32.7歳、女性が30.3歳となり、過去初めて上海女性の平均結婚年齢が30歳を越えた。平均初産年齢は30.36歳、平均出産年齢は31.18歳であった。比較のために2023年2月11日に開催された第3回中国人口・発展フォーラムで公表されたデータを参照すると、2022年の中国全土の合計特殊出生率は1.09であり、女性の平均初婚年齢は26.3歳、初産年齢は27.2歳である⁹⁾。

このような計画生育の方針転換と、現実の上海女性たちのライフコースの選択のせめぎあいにおいて、産後における「科学的」ケアの意味合いもまた変化しつつあるようだ。2016年1月6日の『新民晩報』では、「月嫂はピークを迎えた」という記事において、「全面二核」が開放された上海で月嫂の需要がさらに高まっていることが報じられた。市内のある月嫂仲介会社では月嫂全体の「素質」向上のため、医療スタッフを呼んでケアの理論の勉強や研修に注力したという。

また翌年の2017年の記事「“沪式坐月子” 热悄然兴起 (“上海式坐月子”の急速な盛り上がり)」においては、上海の35歳以上の高齢妊娠女性は「沪式坐月子 (上海式の月子)」をすると報じられた。記事において上海のある月子中心 (医者や看護師、月嫂の常駐する施設) のスタッフは、二人目を出産する女性の中には、初産の際に誤った食事や生活様式をとっていたことで、ホルモン異常を起こして内臓下垂が生じてしまうケースがあると語り、内臓下垂はすべての婦人科系の疾患の根源であるため、「科学的」な「坐月子」をするべきだと主張する。

こうした記事からは、二人っ子政策への転換以降、「科学的」な産後ケアが2人目を産める身体に整えることを指すようになってきていることが分かる。晩婚化が進む上海のような都市社会では、高齢出産はすでに一般的なことになっているが、第二子、第三子を産むことにはさらなるリスクが付きまとう。Zhu (2013) は中国における出生前診断と墮胎の研究において、中国の産婦や女性たちは「潜在可能性」においてリスクを意識した行動をとっていると論じる。「二人っ子政策」「三人っ子政策」への舵切りにおいて、出産を迎える女性たちは、次も「素質」の高い子どもを産み育てられる母体を保持しなければならないという期待にさらされるのである。

二人目の出産を前提に「科学的」ケアで体調を整えるべきといった言説が強

まっていく中、産後ケアをサポートする今日の月嫂は何を求められているだろうか。上海の家政サービス企業X会が実施した研修における観察調査記録を参照することで、商業サービスとしての産後ケアの担い手に、どのような専門的知識やふるまいが求められるようになってきているのかを明らかにしたい。

4. 月嫂に対する期待の変化

4-1. 月嫂仲介会社X会とその研修

X会は月嫂の仲介派遣を行う家政サービス企業であり、上海市内に本社を構える。X社はサービス利用者や月嫂をつなぐだけでなく、定期的に月嫂の専門知識についての研修や、TikTokを介したライブ配信を行うなど、積極的な情報発信で知られている。筆者は2023年5月24日から6月14日にかけてX会の月嫂の研修に参加した。研修は上海市に隣接する蘇州市において行われた。

研修参加者は、29歳から60歳までの女性たち25名によって構成されていた。中心層は自身も出産育児の経験があり、小学生くらいの子どもがいる35歳から45歳の女性であった。近隣の江蘇省、浙江省、安徽省の出身者が多く、上海から遠い地域では山東省、黒竜江省、雲南省の出身者の参加もあった。

参加者たちは、知人の紹介あるいは、老板（経営者のこと）のTikTokを見て研修を申し込んでいた。老板は月嫂の仕事に役に立つ知識を毎晩ライブ配信しており、そのフォロワーは10万人に及ぶ。TikTokにおいて老板は「月嫂が淡々と作業するだけの現状を変え、顧客の不安に応える育児の指導者にしたいのだ」と宣言する。そして最後は「上海で勝者になろう」とシンプルなメッセージで強く訴えかける。

以下の表1は、22日間のスケジュール表である。参加費は6740元（日本円でおおよそ135000円）、食費は別で、水道光熱費が研修の途中で徴収された。

表1 X会研修スケジュール

日付	老手班	新手班
5/24	開会の儀	
5/25	新生児ケア	
5/26	入浴の方法	新生児ケア
5/27	哺乳の方法	入浴の方法
5/28	睡眠管理①	哺乳の方法
5/29	睡眠管理②	調理実習

日付	老手班	新手班
5/30	黄疸と大便	早期教育の基礎
5/31	皮膚の管理	寝かしつけ
6/1	アレルギー	復習テスト
6/2	面接技巧	
6/3	仕事の規則	
6/4	新生児医療の基礎	
6/5	乳房の構造	
6/6	開乳（初めて母乳を出すこと）	
6/7	哺乳の方法	
6/8	乳房のマッサージ	
6/9	溝通（コミュニケーション）技巧の基礎	
6/10	溝通能力訓練（病院編）	
6/11	溝通能力訓練（顧客の家庭編）	
6/12	溝通能力訓練（アイスブレイク編）	
6/13	溝通能力訓練（顧客の褒め方）	
6/14	溝通の注意点	

研修参加者のうち、月嫂の経験者、未経験者は約半数ずつだった。序盤は経験者を集めた「老手班」（ベテラングループ）と、経験のない「新手班」（ビギナーグループ）とにコースが分けられ、研修の後半で合流した。筆者は、研修前半において「老手班」「新手班」に交互に参加した。

毎日午後の研修が始まる前には、講師による10分程度の挨拶があった。それは月嫂としての心構えを説くものであった。以下はそれぞれ6月2日と6月5日の内容である。

講師：今、顧客のママは90后（1990年代に生まれた世代）です。彼女たちは勉強熱心、仕事熱心で、長時間労働や強いストレスに晒された結果、身体のコンドিশョンが良くありません。妊娠出産に対して不安が大きく、そのため要求も多いです。

講師：顧客のお母さん世代は、20代で出産をしているので産後の回復も早かった。皆さんも出産は早かったでしょう。誰もこの新しい状況に

詳しくない。だから私たちは学ぶのです。

講師のこういった発言からは、X会の顧客の傾向だけでなく、上海女性たちの妊娠出産にまつわる悩みと月嫂が求められている役割が見えてくる。

本稿がとりあげてきた人口政策の変化を意識し、専門性をアップデートするような研修は「老手班」においてなされていたため、次項では「老手班」での参与観察を中心に記述することにしたい¹⁰⁾。また、研修後半には、現代上海の女性を顧客に想定したコミュニケーション（中国語で溝通，ゴウトン）技術の向上を図る研修が行われていた。その内容もまた、現代的な「月嫂」に求められる役割を浮かび上がらせるものであったため、あわせて議論していく。

4-2. ケアの専門性をアップデートする

「老手班」には北京や深センといった上海以外の地域で月嫂の仕事のキャリアを積んできた女性たちが参加していた。5月24日の自己紹介では、知識と技術を更新した上で、更なる高収入と月嫂としてのプロフェッショナルリズムを求めて今回の講習に申し込んでいることが伺えた。

赤ちゃんの抱っこや入浴のさせ方を学ぶ「新手班」に比べ、「老手班」で学べる内容は産婦人科において参照されるような知識をふまえたケアであった。母乳育児と黄疸の関係やアレルギーの原因とその対応等を勉強していた。「老手班」では、いわゆる伝統的な「坐月子」で求められる知識を越え、出産の医療化に対応した専門性のアップデートが促されていた。

「老手班」の女性たちがX会の研修において特に関心を寄せていたのは、早産についての知識であった。42歳の山東省淄博（しはく）市出身の月嫂は、8年のキャリアがあり、研修に先んじてX会経由で市内に仕事（顧客の早産のためスケジュールが合わなくなった月嫂の代行）に行くことがあった。彼女は22日間の研修の後にオプションで開催される6日間の早産特化の講習に申し込んでおり、そちらが目当てとのことだった。

オプションの研修では、早産の産婦がなりやすいとされる妊娠高血圧症候群や糖尿病、腎機能障害といった合併症、赤ちゃんに先天的な食道閉鎖症があった場合同時に発症する可能性がある誤嚥性の肺炎について勉強できる。NICU（新生児集中治療室）を模した会場で、保育器でのおむつ交換など病院内で働く1日をシミュレーションする実習も含まれた。研修の案内には、本当に重篤な場合をのぞいて、ケアに介入する余地がある場合のスキルを身につけておくことがこれからの月嫂に必要なことが呼びかけられていた。

4-3. 上海女性の不安に寄り添うコミュニケーション

研修の折り返し地点になると、「新手班」と「老手班」が合流した。それまでが新生児のケア中心だったのに対して、2つの班が合流してからは産婦のケアに重きが置かれた。

6月6日の「开奶（カイナイ）」という研修では、産後すぐに行う乳管を開通させるマッサージの練習をした。“病院で出産を終えた女性に初めての乳房マッサージを施す”というシチュエーションのもと実習が行われた。講師が研修生の一人に対して実際にマッサージをやってみせながら、同時に声掛けの手本を提示した。

講師：大変な仕事を終えましたね！もう大丈夫です。あとは私に任せて、ゆっくり休んでください。赤ちゃんは私が見ていますから、何も心配せず眠ってください。

研修生たちは、全員に出産経験があるため「それはいいね」「眠りたいよね」と口々に反応していた。このとき産婦とのコミュニケーションの注意点が説明された。

講師：初産のママは不安でいっぱいです。特に高齢出産の場合、ママは子どもの健康を本当に心配しています。健康に生まれてきてくれるか、おっぱいはちゃんと出るのか。もしママの母乳が少なかったからといって、見て思ったままに「少ない！」だとか「赤ちゃんがかわいそう」などと言ってははいけません。

これらは実際にX会に寄せられた顧客からのクレームであるという。そして「产后忧郁（産後うつ）」の言葉がホワイトボードに書かれ、とりわけ高齢出産の場合にはうつになりやすいことが説明された。

続く6月7日も、顧客を励ますテクニックとして、根拠があって、かつポジティブな気持ちになれる声掛けを学んだ。

講師：おっぱいが出ましたよ！少ない？いいえ、大丈夫。いきなりたっぷりあって赤ちゃんは飲めませんから。お母さんはちゃんと務めを果たしていますよ。

研修生たちはシチュエーションごとに、こういった例文を覚えては繰り返し

練習した。

6月8日は、乳房に張りやしこりがあるときに適したマッサージを学んだ。ある研修生が「そんなやり方では出るものも出ない」と強く乳房を揉みほぐしたとき、講師はすぐに止めに入った。「母乳は力づくで出すものではない。乳頭の刺激によって母乳分泌を促すホルモンを出すことから始まる」と伝えたいうえで、自身の出産経験を涙ながらに語り、「学びのない、ママを不安にする月嫂はすぐに淘汰されるでしょう」と最後に釘を刺した。

ここまで研修の内容を概観してきた。X会は、顧客とのやり取りを通じて、高齢出産することが一般的になった上海の女性たちが抱える不安、してほしくないことについて、商業サービスとして対応しようとしていた。高い「素質」をそなえた子どもを産み育てられるか否かをめぐる「潜在可能性」に今の顧客が不安を抱えていることをよく理解し、技術面の向上だけでなく不安をほぐすようなコミュニケーション訓練にも注力した。あくまで「上海市場で勝者になる」という目的が前提にあるものの、結果的に月嫂たちは現代上海を生きる女性の抱えるプレッシャーに対応していることになる。このような研修を経た月嫂たちによるサポートにおいて、「坐月子」はすでに伝統的な慣習を越えて、現代の上海のライフスタイルに適した文化実践として再編されている。

おわりに

ここまで、商業都市である上海で、「坐月子」のケアサービスを提供する月嫂が何を期待されてきたのかについて、ローカル紙『新民晩報』の分析と、月嫂の研修の参与観察から得られたデータを中心に分析してきた。

上海市の地元紙『新民晩報』によれば、市内では1990年代末に国有企業解体で実質の失業状態にあった女性の再就職先として月嫂が登場した。しかし上海女性の職業として月嫂は定着せず、2007年のベビーブームによる月嫂不足の中で上海近郊の農村女性が担うようになった。サービスの質や月嫂の労働環境が問題となる中、2000年代後半は業界の規範化が進められた。

2010年代に入ると、「優生優育」の人口政策のもと、産婦たちは妊娠前検査や出生前診断を通じて「素質」の高い子どもを産み育てる責任を負うことになった。2016年の「全面二核」以降は「科学的」な産後ケアによって二人目を産める身体に整えることが強調されはじめた。この流れの中、月嫂は科学的なケアを提供する専門家として報道されるようになった。

上海市内に月嫂を派遣するX会の研修の調査では、現代上海で働く月嫂たちの研修が、高齢出産を想定した内容となっており、知識と技術の習得だけな

く、産婦を励まし安心させるためのコミュニケーションスキルを重んじていたことが明らかになった。それは上海市内の晩婚化や出産年齢の高齢化に関連して生じるリスクを踏まえてのことであった。

月嫂の役割はどのように変遷したと言えるか。2010年代前半の月嫂は、「科学的」な産後ケアを提供し「素質」を高める役割が期待されるようになった。報道を見る限りでは2010年代後半以降、月嫂は出産の高年齢化と二人目の子を産み育てるプレッシャーに対応したパフォーマンスが求められている。2020年代の月嫂の実情はどうであろうか。月嫂の研修・派遣を行う商業サービスは、上海女性の不安について顧客のクレーム等から理解しており、不安を緩めるためのコミュニケーション能力の向上を目指していた。コミュニケーション能力のスキル向上はあくまで上海市場で生き残るための方法ではあるものの、結果として顧客である上海女性の不安に寄り添うものになっていた。

本稿では月嫂に期待される役割について考察を行ったが、上海における産後ケアの商業化の趨勢において活発にビジネスを展開するX社の研修内容は、現代の上海女性たちが抱える不安の大きさを間接的に浮かび上がらせていた。「素質の高い」子を産み育てるプレッシャーの中で、実際に女性たちがどのように妊娠、出産、子育てをしているのか、今後の調査で明らかにしていきたい。

(さいとう あおい 一橋大学大学院)

謝辞：本稿は科学研究費助成事業（20J21531）、日本学術振興会若手研究者海外挑戦プログラムの助成を受けて完成した。また、華東理工大学社会与公共管理学院黄玉琴教授の監修のもと、中国での現地調査を行うことができた。厚く御礼申し上げたい。

[注]

- 1) 大橋は家政サービスを狭義では家庭内で行われるとされる再生産労働、すなわち炊事、掃除や洗濯、ケアによる報酬を得て代行するサービス、広義ではそのような仕事をする者（家事労働者）の仲介・斡旋をふくめたサービスのことと定義する（大橋 2011：4）。
- 2) 『新民晩報』は上海に本社を構え市内で最も読まれる夕刊である。中国共産党上海市委員会が直接指導する大衆新聞であり、編集方針として「政策の宣伝、知識の普及、風俗の変革、生活の豊かさ」を掲げる（中国学術論文データベース CNKIの紹介文より抜粋）。大衆向けの商業新聞という点で上海という都市の変

化、風俗を読み取ることに適している。

- 3) 本文の内容が一貫して月嫂について扱っている記事。見出しに月嫂と入っているが、本文中でほとんど触れられていない記事については対象外とした。
- 4) シアガンと読む。1990年代に推進された国有企業改革において、職場のリストラチュアリングに伴う一時帰休は当時このように呼ばれていた。実質的な失業であり、下崗の対象者は職業訓練を受けて再就職することを求められた。
- 5) 中国都市に多く見られる集合住宅エリアのこと。
- 6) ふじょれんと読む。公式には政治機関ではないが、事実上は中共連帯の関連組織であり、人事も党によって決定される（大橋 2011：41）。本論文で登場するのは上海市の上海婦女聯である。
- 7) 大橋の研究では北京の農村出身の家事労働者たちも「保姆」という呼び方を受け入れ難く感じていることが示される（大橋2011：24）。
- 8) 矛盾のない調和のとれた社会のことを指す中華人民共和国のスローガン。
- 9) 人民網日本語版、「生涯子供を持たない中国の女性の割合が急上昇」, <https://x.gd/n8G4i> (2024年3月15日最終アクセス)。

【引用文献】

- 安姍姍 2015 「中国都市部における月子をめぐる産育文化の再構築に関する一考察—月嫂の果たす役割を中心に—」『子ども社会研究』, 21, 137-150
- JETRO (独立行政法人日本貿易振興機構) 2010 「上海市09年新卒の月給が6.3%増」ビジネス短信 <https://x.gd/C3SvI> (2024年6月27日最終アクセス)
- Kipnis, Andrew. 2006 Suzhi: A Keyword Approach. *The China Quarterly*, 186, 295-313
- 小浜正子・何燕侠・姚毅 2009 『中華人民共和国における出産と生殖コントロールの進展と女性たちの対応』（基盤研究（C）（一般）H18-20）
- 小浜正子・松岡悦子 2014 『アジアの出産と家族計画—「産む・産まない・産めない」身体をめぐる政治』 勉誠出版
- 松岡悦子 2022 「韓国の出産と産後調理院」, 白井千晶編『アジアの出産とテクノロジー—リプロダクションの最前線』 勉誠出版, 233-235
- 大橋史恵 2004 「家政サービスについての議論の変遷—20年間の変化と課題—」『中国女性史研究』, 13, 1-15
- 大橋史恵 2011 『現代中国の移住家事労働者—農村・都市関係と再生産労働のジェンダー・ポリティクス』 お茶の水書房
- 翁文静 2014 「中国都市部における家政婦月嫂 (sao) の成立と発展—上海市を中心に—」『国際教育文化研究』, 14, 103-114

- 齋藤あおい 2023 「市場経済期上海における産後ケア—家政サービスと「月嫂」の出現に注目して—」『中国社会学研究』, 30, 137-145
- 上海市統計局 2023 「上海統計年鑑2022年」 <https://x.gd/aNHgm> (2024年3月15日最終アクセス)
- Sigley, Gary. 2009 Suzhi, the Body, and the Fortunes of Technoscientific Reasoning in Contemporary China. *Positions*, 17(3), 537-566
- 嶋澤恭子 2022 「ラオスにおける産後女性の慣習—ユーファイを巡って」, 白井千晶編『アジアの出産とテクノロジー—リプロダクションの最前線』 勉誠出版, 236-240
- 于麗玲・塩見佳也・加藤穰・宍戸圭介・池澤淳子・粟屋剛 2013 「中華人民共和国母嬰保健法にみる「優生優育」政策」『生命倫理』, 23(1), 125-133
- 姚毅 2022 「生命リスク回避の「テクノロジー」と優生願望—中国・台湾の出生前検査を事例に」, 白井千晶編『アジアの出産とテクノロジー—リプロダクションの最前線』 勉誠出版, 233-235
- Zhu, Jianfeng. 2013 Projecting Potentiality: Understanding Maternal Serum Screening in Contemporary China. *Current Anthropology*, 55, 36-44 (2024年9月15日掲載決定)
- 人民網日本語版 2024 「生涯子供を持たない中国の女性の割合が急上昇」, <https://x.gd/n8G4i> (2024年3月15日最終アクセス)。

Commercialization of Postpartum Care in Shanghai:

Evolution of Population Policy and Changing Role of Yuesao

SAITO Aoi

(Hitotsubashi University)

In China, “sitting the month” is a traditional practice where postpartum women and their newborns rest for a month. Since the 2000s, commercialized postpartum care has become common in urban areas like Shanghai. This paper examines changing expectations for domestic workers in this field through newspaper analysis and fieldwork.

An analysis of Shanghai's local newspaper, *Xinmin Evening News*, revealed that in the late 1990s, Yuesao work was seen as a reemployment opportunity for women who lost their jobs due to the dismantling of state-owned enterprises. Amid a shortage of Yuesao caused by a baby boom, rural women from the outskirts of Shanghai began to fill these roles. By the 2010s, under the population policy of “well-bear and well-rear” (*yousheng youyu*), postpartum women were increasingly expected to raise children with high “quality.” In this context, the discourse that “sitting the month” should provide scientific care to prepare women for a second child became stronger. With increasing pressure, what was expected of Yuesao who worked in customers' homes? My fieldwork shows that the facility for Yuesao focuses on improving knowledge and skills to reassure postpartum women concerned about the impact of late childbirth, as well as training in communication.

Keywords: postpartum care, China, *zuoyuezi*, domestic service, well-bear and well-rear